佐土原町文化財調査報告書第19集

内城（うちしろ）第1遺跡

－ 宮崎地区・北伊倉携帯電話無線基地局建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 －

―― 2001.3 ――

宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会

序

この報告書は、宮崎地区・北伊倉携帯電話無線基地局建設事業に伴い、平成１１年度に佐土原町教育委員会が主体となり調査した内城第１遺跡発掘調査の記録です。

佐土原町では、開発事業が計画される地域の埋蔵文化財発掘調査を事前に行い、先人の残した遺跡や道具など文化財の調査・保護と啓発に努めています。

今回の発掘調査地は、中世期の山城の一つである内城の東端に張り出した曲輪部分であり、町内に点在する中世期の山城を解明するうえで重要な遺跡であるととらえています。

また、縄文時代から人々が生活をしていた痕跡も確認されており、佐土原において古代から人々が生活をしていたことを示す貴重な情報も得ることができました。

この発掘調査の記録が、今後の佐土原の歴史を紐解くための研究・考察の基礎となり、文化財への理解と認識をさらに深め、教育・研究の現場等で幅広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、関係各位より頂いたご指導・ご協力に対し心よりお礼を申し上げます。

平成１３年３月

佐土原町教育委員会
教育長　菊池俊彦

例　言

1．本書は、宮崎地区・北伊倉携帯電話無線基地局建設事業に伴う「内城第１遺跡」の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、株式会社　エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州の依頼を受け、佐土原町教育委員会が主体となり、平成１１年度に社会教育課文化財係が行った。

3．発掘調査は平成１１年４月１６日から５月３１日まで行った。

4．本書に使用した写真は、木村が撮影し、空中写真測量は、朝日航洋株式会社が行った。

5．本書で使用した位置図などは、国土地理院発行の縮尺２万５千分の１地形図を基に作成した。

6．出土遺物は、佐土原町教育委員会（佐土原町出土文化財管理センター）で保管している。

7．色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版　標準土色帖」による。

8．方位は磁北、レベルは海抜高である。

9．遺構の略号は以下の通りである。

　　Ｐ＝柱穴　ＳＥ＝溝状遺構　ＳＩ＝集石遺構　ＳＸ＝性格不明土坑

１０．地形・地質については、穴戸地質研究所穴戸　章所長の指導を受けた。

１１．本書の執筆・編集は、木村主査が担当した。

※本調査と平行して県埋蔵文化財センターが行った分布調査との整合を考慮しながら考察した。

目　　次

（本文目次）

第１章　はじめに …… 8
　第１節　調査に至る経緯 …… 8
　第２節　調査の組織 …… 8
　第３節　遺跡の位置と環境 …… 9

第２章　内城第１遺跡の調査 …… 12
　第１節　調査の概要 …… 12
　第２節　基本層序 …… 12
　第３節　遺構 …… 13
　第４節　遺物 …… 17

第３章　まとめ …… 24

（挿図目次）

第１図　内城第１遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 10
第２図　内城第１遺跡の調査範囲と周辺地形図 …… 11
第３図　内城第１遺跡基本土層図 …… 12
第４図　内城縄張図 …… 14
第５図　内城第１遺跡等高線図 …… 15
第６図　内城第１遺跡遺構分布図 …… 16
第７図　内城第１遺跡遺物分布図 …… 19
第８図　内城第１遺跡出土遺物実測図（１） …… 20
第９図　内城第１遺跡出土遺物実測図（２） …… 21

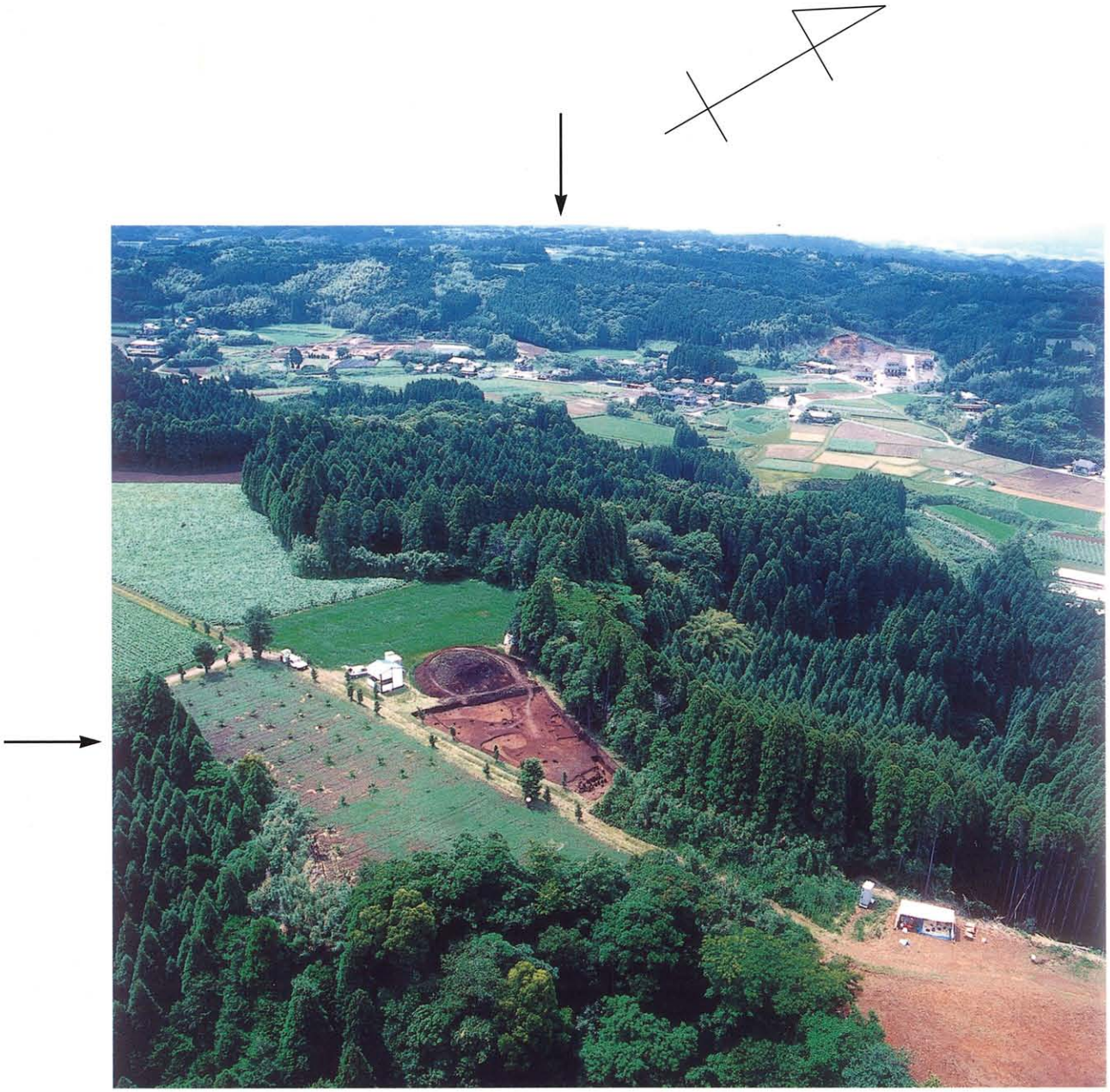
（表目次）

第１表　内城第１遺跡出土遺物観察表（１） …… 22
第２表　内城第１遺跡出土遺物観察表（２） …… 23

（図版目次）

図版１　内城第１遺跡全景 …… 1
図版２　内城第１遺跡真上 …… 2
図版３　内城第１遺跡遺構（１） …… 3
図版４　内城第１遺跡遺構（２） …… 4
図版５　内城第１遺跡作業風景 …… 5
図版６　内城第１遺跡出土遺物（１） …… 6
図版７　内城第１遺跡出土遺物（２） …… 7

図版1



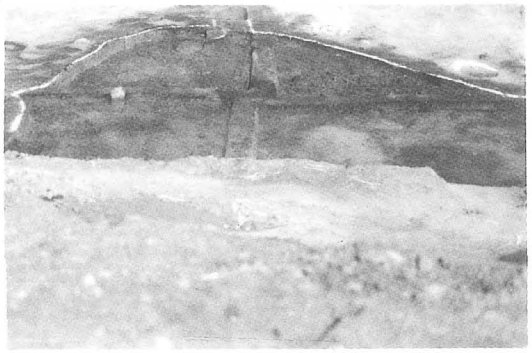
内城第１遺跡全景

図版2

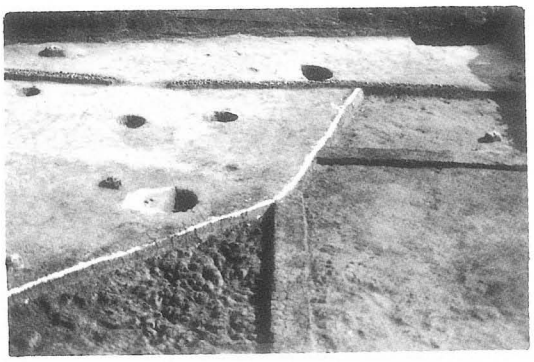
内城第１遺跡真上

調査前近景

調査前遠景



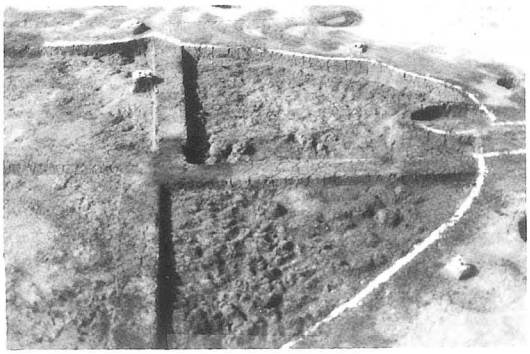
性格不明土坑



検出状況(北側から)

検出状況(東側から)

検出状況(西側から)

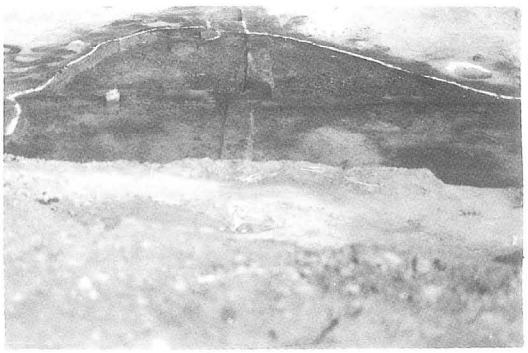


性格不明土坑

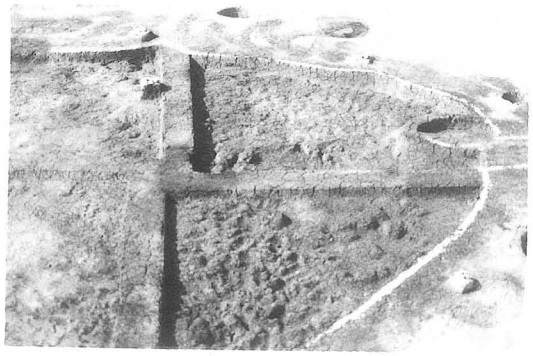
検出状況(西側から)

内城第1遺跡遺構（1）

検出状況(東側から)

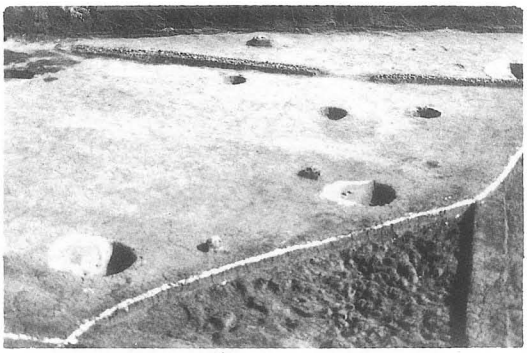


性格不明土坑



性格不明土坑

性格不明土坑内出土遺物



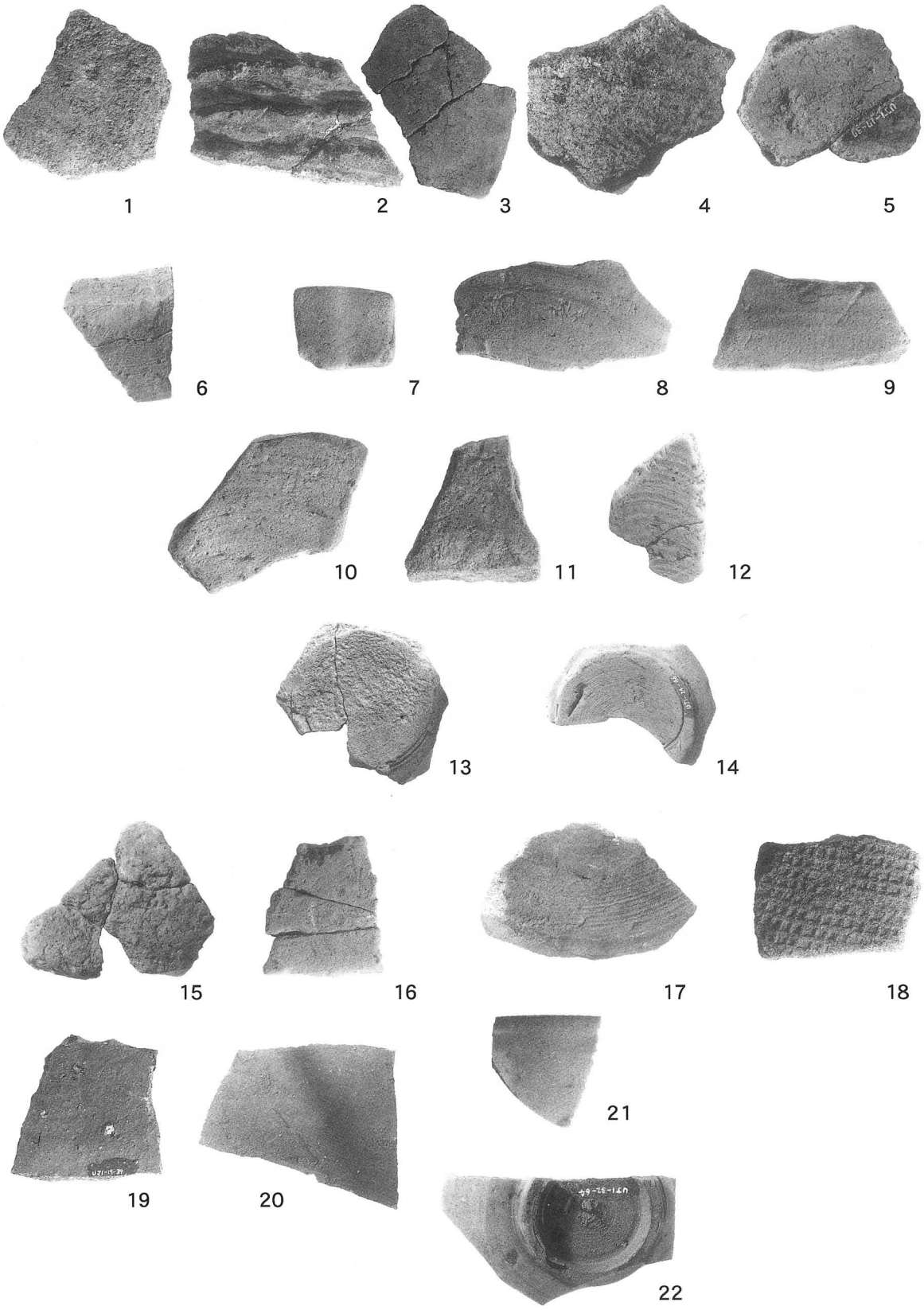
検出状況(北側から)

柱穴

北東隅壁面トレンチ

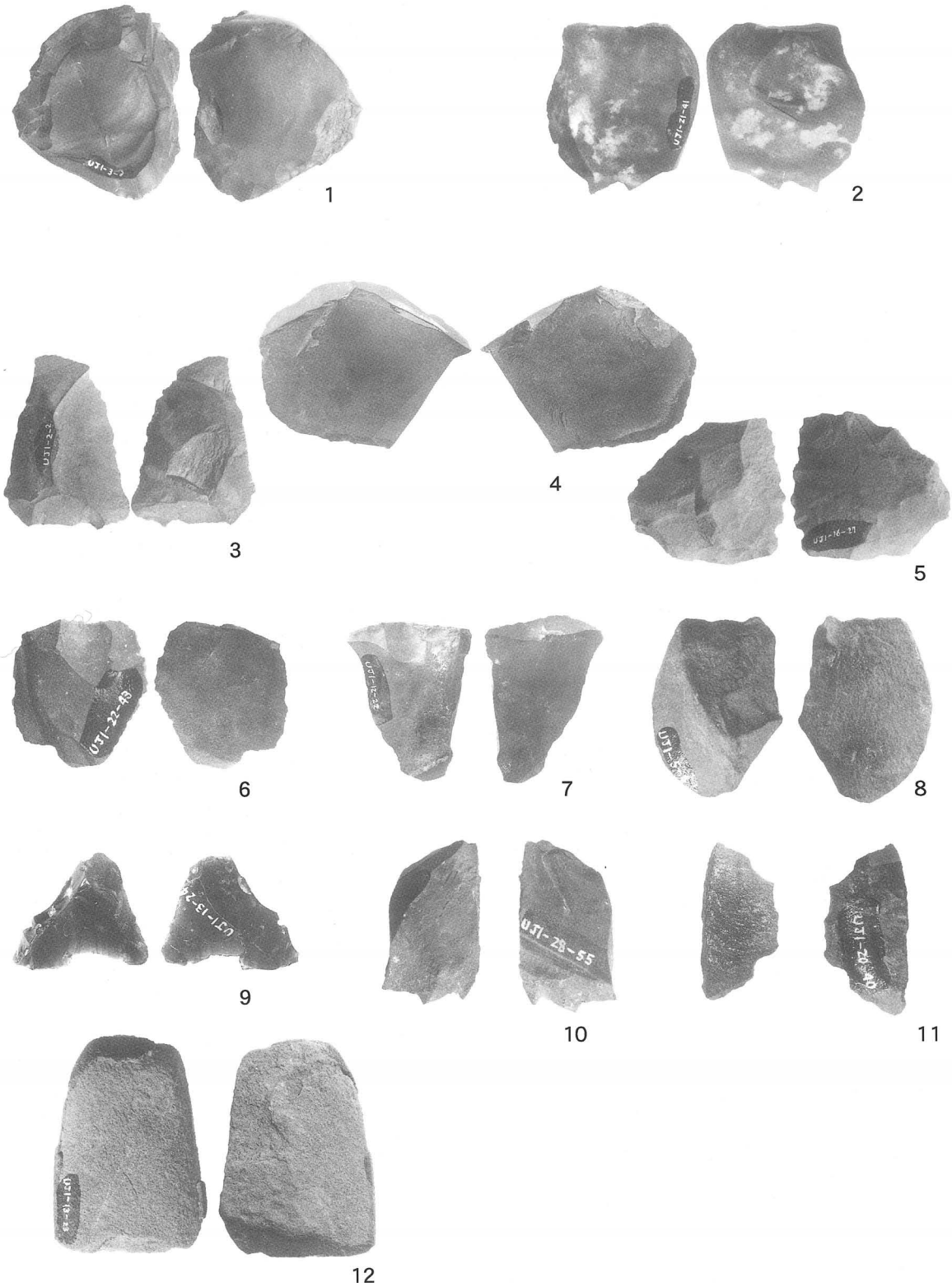
性格不明土坑

内城第１遺跡作業風景



内城第１遺跡出土遺物（１）

図版7



内城第１遺跡出土遺物（２）

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

今日の情報通信は、防災活動・産業経済活動・住民の生活上において、欠かすことのできない重要なものとなっている。なかでも、携帯電話やＰＨＳなどの移動体通信は、近年の急速な普及率に比べ、その利用範囲は未だ未整備の部分が多く、すべての地域においてその恩恵を享受できない状況のようである。

こうした課題を解決するため、近年、無線基地局の増設が各地で行われている。

こうした状況の中、携帯電話無線基地局建設予定地として挙げられた地点が佐土原町内文化財包蔵地「内城第1遺跡（５００４）」にあたるため、町教育委員会と株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州とで協議を行い、確認調査を行うこととなった。確認調査は、開発予定地のうち約４６０㎡について実施した。確認調査は、４本のトレンチを設定して行われたが、その結果、柱穴の検出や遺物の出土を確認することができた。株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州との協議の結果、遺跡の保存は困難であることから佐土原町教育委員会を主体として、記録保存を目的とする発掘調査（調査面積572.84㎡）を実施することとなった。

調査対象地は畑地で、調査期間は平成１１年４月１６日から同年５月３１日までである。

第２節　調査の組織

平成１１年度

調査主体	佐土原町教育委員会	教育長	菊池　俊彦
		社会教育課長	郡司　利文
		同課長補佐	河越　弘明（7月から）
	庶務担当	文化財係長	東　浩一郎
	〃	主査	黒木　直英
	調査担当	主査	木村　明史
	〃	主事	櫛間　史朗
	佐土原城跡歴史資料館	館長	赤木　達也
	出土遺物整理員	[redacted]（１２月まで）	
		[redacted]（2月から）	[redacted]（1月～3月まで）

平成１２年度

調査主体	佐土原町教育委員会	教育長	菊池　俊彦
		社会教育課長	郡司　利文
		同課長補佐	河越　弘明
	庶務担当	文化財係長	東　浩一郎
	〃	主査	黒木　直英
	調査担当	主査	木村　明史
	〃	主事	櫛間　史朗
	佐土原城跡歴史資料館	館長	赤木　達也
	出土遺物整理員	[redacted]（8月まで）	[redacted]
		[redacted]（１０月から）	

第３節　遺跡の位置と環境

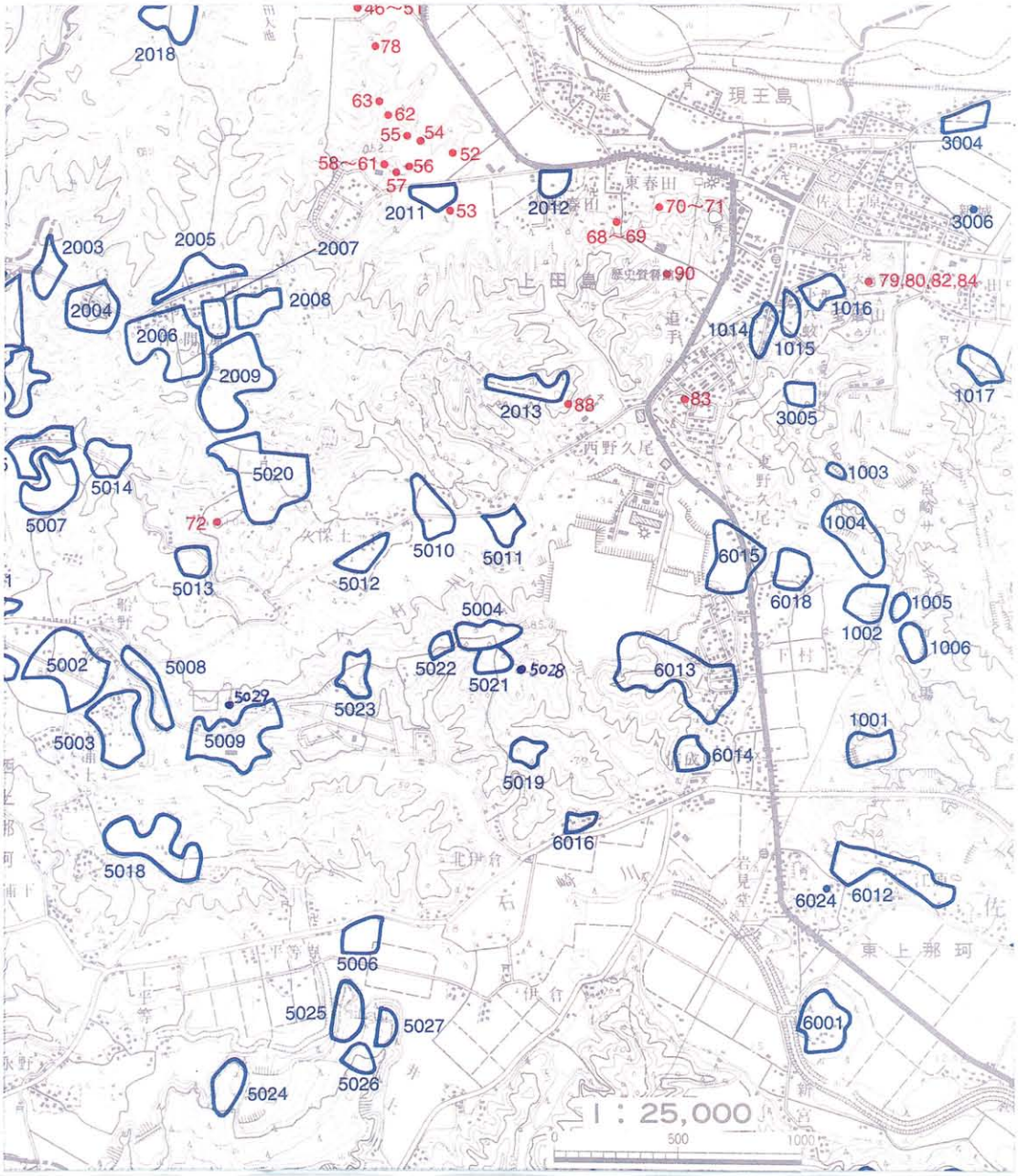
まず、地理的環境として、内城第1遺跡（５００４）の所在する佐土原町は、宮崎県海岸沿いのほぼ中央に位置する。東側を日向灘に面し、北側を新富町、西側を西都市・国富町、南側を宮崎市に接しており、町域面積の大半を山地が占めている。地形はその特徴から、都於郡・仲間原台地、船野台地、年居台地と鹿野田・上田島丘陵、佐土原丘陵と一ツ瀬川低地、広瀬海岸低地、那珂低地に区分することができる。東部海岸沿いには、平野が南北に広がっていて、町の北側には一ツ瀬川、中央部は石崎川が流れ、石崎川水系である井上川・亀田川・下村川・新宮川が支流として山地をぬっている。町域内には、巨田の大池・高峯池・上の池・迫越池・山倉池・鶴府池・今坂池・刈井田池・宮ヶ迫池・成枝池など灌漑用の溜め池が多数存在している。

内城第1遺跡（５００４）は、石崎川河口から西に約８ｋｍ入った標高約８５ｍの山頂に広がる遺跡であり、北側麓には石崎川水系の下村川が流れる。

次に、歴史的環境として、台地の遺跡は主に先史時代の遺跡で占められている。時代は、旧石器時代前期から縄文時代の間である。特に船野台地では、旧石器時代後期に相当する船野遺跡から細石器文化を代表する船野型石核が出土している。また、下屋敷遺跡（５００１・５０１６）では、旧石器時代後期の礫群遺構が33基以上検出され、遺物はナイフ型石器・剥片尖頭器・スクレイパー・石核・敲石・磨石などが出土している。また、縄文早期の遺構も集石が3基検出され、遺物が打製石鏃・局部磨製石斧・剥片・押型文土器・無文土器などが出土している。都於郡・仲間原台地の中央に位置する山内遺跡（２０１０）・桜原遺跡（２０１６）・西ヶ迫遺跡（２００２）では、縄文時代早期の炉穴などが65基以上検出されているが、これは九州内においても異例の多さである。出土遺物は、貝殻円筒土器・無文土器などである。

次に、丘陵地帯は、入戸火砕流堆積物により大半が築かれており縄文時代後期以降の遺跡が残っている。佐土原丘陵北西部では、隠山遺跡（１００３）（平成４年８月～１２月発掘調査）が確認されており、遺構は縄文草創期の集石遺構、中世期から近世期にかけての寺院跡が検出されている。遺物としては、縄文草創期から弥生期にかけての土器、中世期から近世期にかけての陶磁器、瓦堂などである。古城第1遺跡（１００７）（平成５年１月～２月発掘調査）では、中世期の城館跡の遺構が検出されている。遺物は、陶磁器が数点出土した。佐土原丘陵西部には、大光寺・高月院・崇称寺・吉祥寺・松巌寺・誓念寺・多楽院などの中世期からの寺院が多数残っている。同じく西部において平成３年度より発掘調査が行われ、下村窯跡群が確認された。この窯跡からは、日向国分寺や日向国府推定地である寺崎遺跡（西都市大字右松字寺崎）出土の瓦と同系統のものが出土しており、これらの遺跡との需給関係が推測される。佐土原丘陵中央部から南部にかけては、古墳時代の横穴墓である広瀬村古墳群（１～２２）が数多く残っている。鹿野田・上田島丘陵にも古墳時代の横穴墓である佐土原町古墳群（４３～７８）が多数ある。

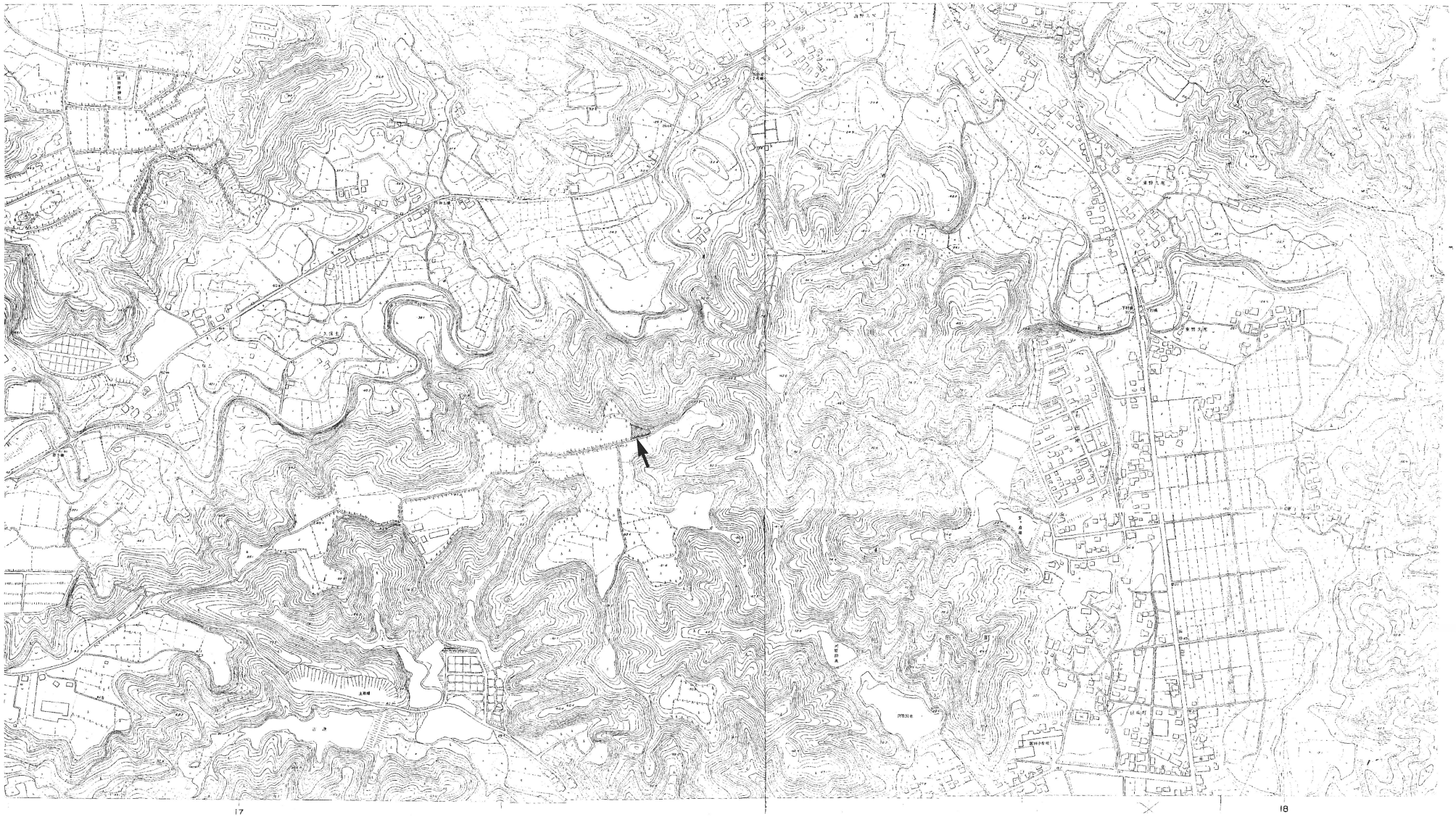
最後に低地においては、広瀬海岸低地の伊賀給遺跡（１０２２）が平成９年６月からの発掘調査で弥生時代後期から中世にかけての水田跡であると確認された。特に、弥生時代後期の水田跡は小区画５３枚が検出されている。遺物としては、木材（推定年代３，５００年前）・弥生土器片・土師器片などが出土している。



1001	叶迫遺跡	1002	山田第１遺跡	1003	隠山遺跡	1004	坂ノ下遺跡
1005	山田第２遺跡	1006	山田第３遺跡	1014	後田第１遺跡	1015	後田第２遺跡
1016	後田第３遺跡	1017	宮ヶ迫遺跡	2003	杉尾遺跡	2004	五月田遺跡
2005	永尾遺跡	2006	長谷遺跡	2007	仲間原遺跡	2008	今僧津遺跡
2009	大原遺跡	2011	鶴府遺跡	2012	岩崎遺跡	2013	野久尾遺跡
2018	曲田遺跡	3004	祝畑遺跡	3005	茶屋窯跡	5002	古園遺跡
5003	野地遺跡	5004	内城第１遺跡	5006	上鳥巣遺跡	5007	小永迫遺跡
5018	南学原第１遺跡	5009	南学原第２遺跡	5010	境畑遺跡	5011	尾曲遺跡
5012	松本遺跡	5013	横山遺跡	5014	永谷遺跡	5018	松山遺跡
5019	内城第２遺跡	5020	佐野原遺跡	5021	内城第３遺跡	5022	内城第４遺跡
5023	中原遺跡	5024	森園遺跡	5025	学頭第１遺跡	5026	学頭第２遺跡
5027	宮の前遺跡	6001	中島遺跡	6012	福城寺遺跡	6013	松月下第１遺跡
6014	松月下第２遺跡	6015	新馬場遺跡	6016	伏原遺跡	6018	西村第２遺跡

●県指定古墳

第１図　内城第１遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　内城第１遺跡の調査範囲と周辺地形図

第２章　内城第１遺跡の調査

第１節　調査の概要

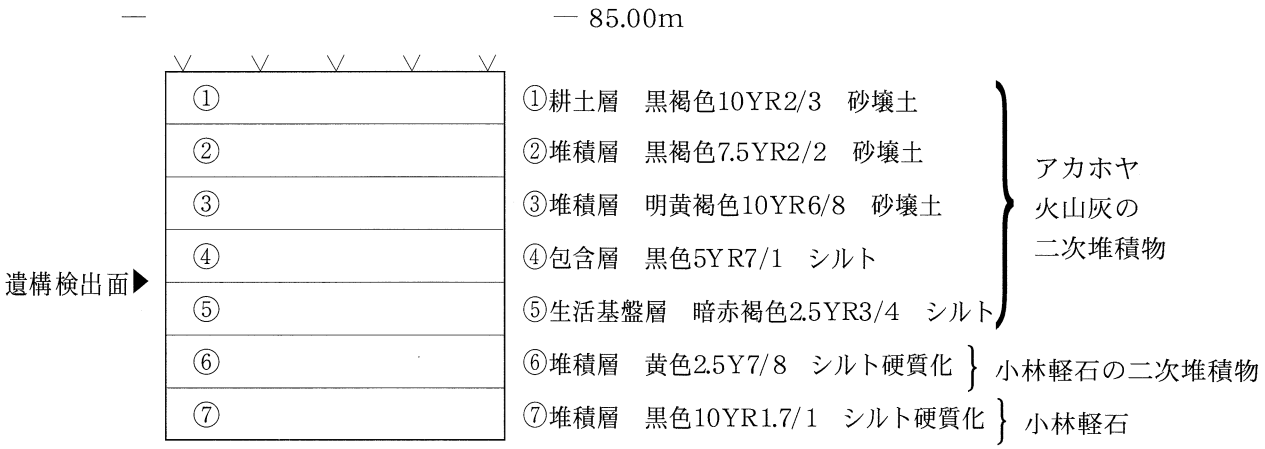
内城第１遺跡は、内城と呼ばれる城郭の曲輪の一画を占める。内城は、佐土原城の南約１ｋｍの地点に緩やかな平坦面が広がる台地上（標高８５ｍ前後）に展開する。発掘調査地の所在する曲輪Ⅰ（第４図）は、城郭全域を俯瞰すると台地上から尾根が放射状に張り出す蛸足状の景観のほぼ中心に位置する。曲輪の機能は、東西南の各方面を堀切で、北側を急斜面によって防禦され各曲輪の中で最も要害な箇所を占め主郭の役割を果たしている。

今回の調査地は、主郭曲輪の機能を有する曲輪Ⅰの東側先端に位置し、東側隣は堀を挟んで曲輪Ⅳが並んでいる。調査地の現況は畑地で、調査は重機により約３０ｃｍの深さで耕作土を除去後、遺構を検出した。遺構検出面からは、柱穴２９・性格不明土坑１１・集石遺構２・溝状遺構１を確認した。また遺物は、縄文土器２・弥生土器３・土師質土器１２・須恵器１・陶器４・剥片７・尖頭状石器２・円形掻器１・石鏃１・石斧１の計３４点が出土した。

第２節　基本層序（第３図）

調査地及び周辺は、新田原段丘面に位置し、通常アカホヤ火山灰（約６，５００年前の降下火山灰。以下ＡＨ)、小林軽石（約１６，０００年前の降下火山灰。以下Ｋｂ)、姶良丹沢火山灰（約２５，０００年前の降下火山灰。以下ＡＴ)、アワオコシ（約４万年前の降下火山灰。以下ＡＷ)、イワオコシ（約４万年前の降下火山灰。以下ＩＷ)、第３オレンジ（約５万年前の降下火山灰。以下Ｏｒ３)、阿蘇４火砕流堆積（約８万年前の降下火山灰。以下Ａｓｏ４）の７つのテフラの堆積が確認できる。

調査の層序は、１層から７層に分層した。この中で埋蔵文化財の出土層は、４～６層で、約６，５００年～５００年前に堆積した層である。時代区分は、縄文時代～中世後半（室町期）に相当する。遺構・遺物出土層は、５層で中世城郭の施設跡が検出された。



第３図　内城第１遺跡基本土層図　　Ｓ＝１：40

第３節　遺構

内城第１遺跡は、５層の生活基盤層から柱穴２９・性格不明土坑１１・集石２・溝状の遺構１が出土した。

柱穴（第６図）

調査地区の北側・中央・西側にまとまって柱穴が検出された。総計２９穴で大きさは、直径約４０ｃｍ～８０ｃｍ・深さ約２０ｃｍ～３０ｃｍを測る。柱穴内に入っている埋土【砂壌土：黒褐色（１６穴)、粘土：茶褐色（１３穴)】から２時期にかけて使用していたと推測できる。時期は、柱穴埋土から出土した遺物によって中世期に普請し営まれたと思われる。

性格不明土坑（第６図）

調査地区の中心部と南北の調査区設定の壁面に沿って性格不明土坑が広がる。総計11で大きさは、北側壁面側ＳＸ１：東西約１ｍ５０ｃｍ・南北約３ｍ、ＳＸ２：東西約１ｍ２０ｃｍ・南北約２ｍ２０ｃｍ、ＳＸ３：東西約２ｍ・南北約３ｍ、ＳＸ４：東西約１１ｍ・南北約７ｍ、ＳＸ５：東西約７ｍ・南北約６ｍ、ＳＸ６：東西約１ｍ５０ｃｍ・南北約３０ｃｍ、ＳＸ７：東西約４０ｃｍ・南北約２ｍ７０ｃｍ、ＳＸ8：東西約１ｍ８０ｃｍ・南北約１ｍ５０ｃｍ、ＳＸ９：東西約２ｍ・南北約１ｍ、ＳＸ１０：東西約５０ｃｍ・南北約１ｍ50ｃｍ、ＳＸ１１：東西約２ｍ５０ｃｍ・南北約５０ｃｍを測り、深さは約２５ｃｍ～３０ｃｍである。形は、不定形で中世期城郭を築く際に何らかを普請し、廃城後に土層観察から自然堆積していたと思われる。

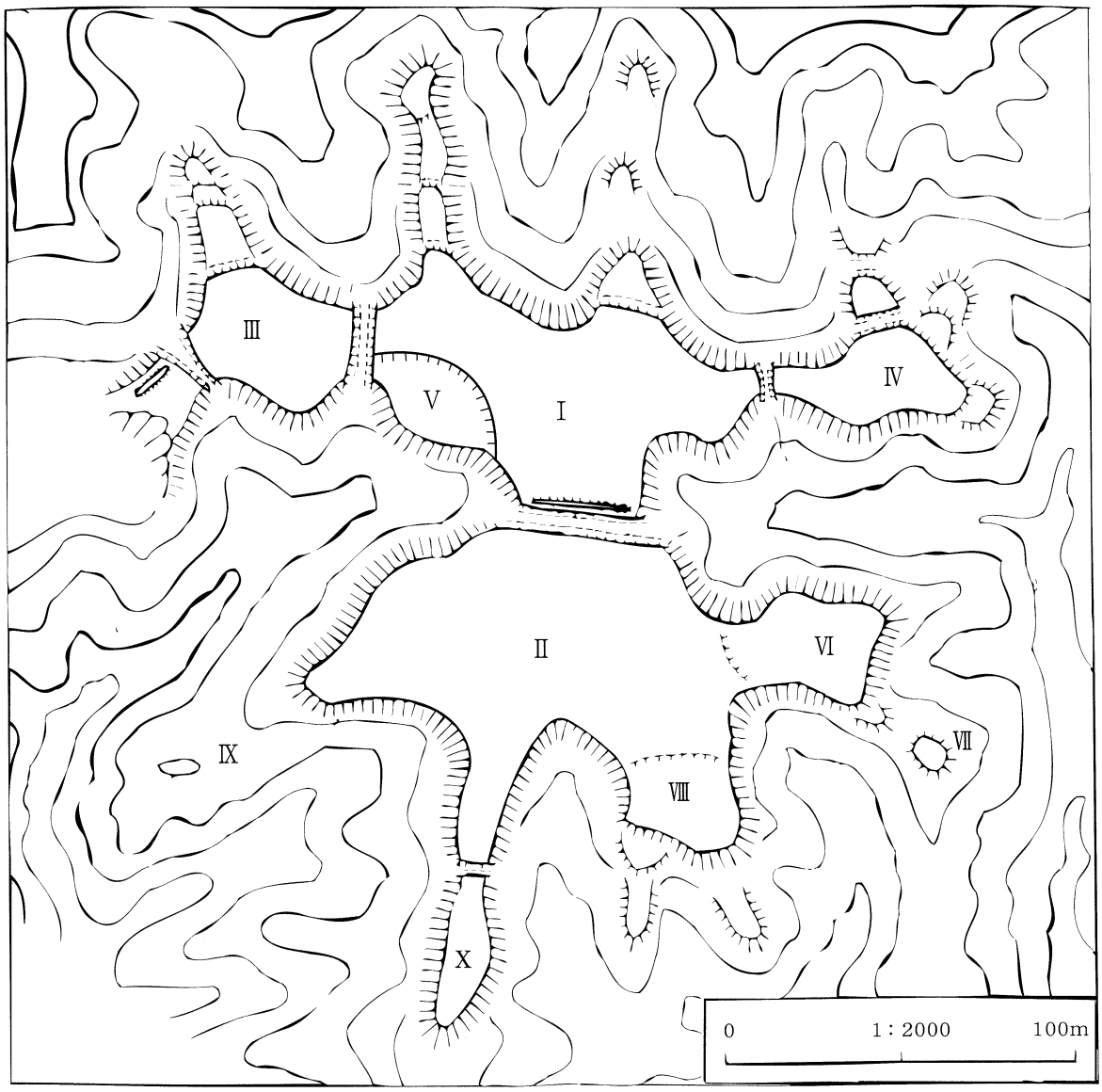
集石遺構（第６図）

調査地区の西南隅と東南隅に東西方向に沿って集石が走っている。集石遺構は総計２で大きさは、西南隅ＳＩ１：幅約３０ｃｍで東西方向に約１１ｍ、東南隅ＳＩ２：幅５０ｃｍで東西方向に約５ｍ５０ｃｍ走る。ＳＩ２は、溝状遺構の両肩上面に造られていることから溝の橋及び施設間の区分けとしての機能を果たしていたと推測される。

溝状遺構（第６図）

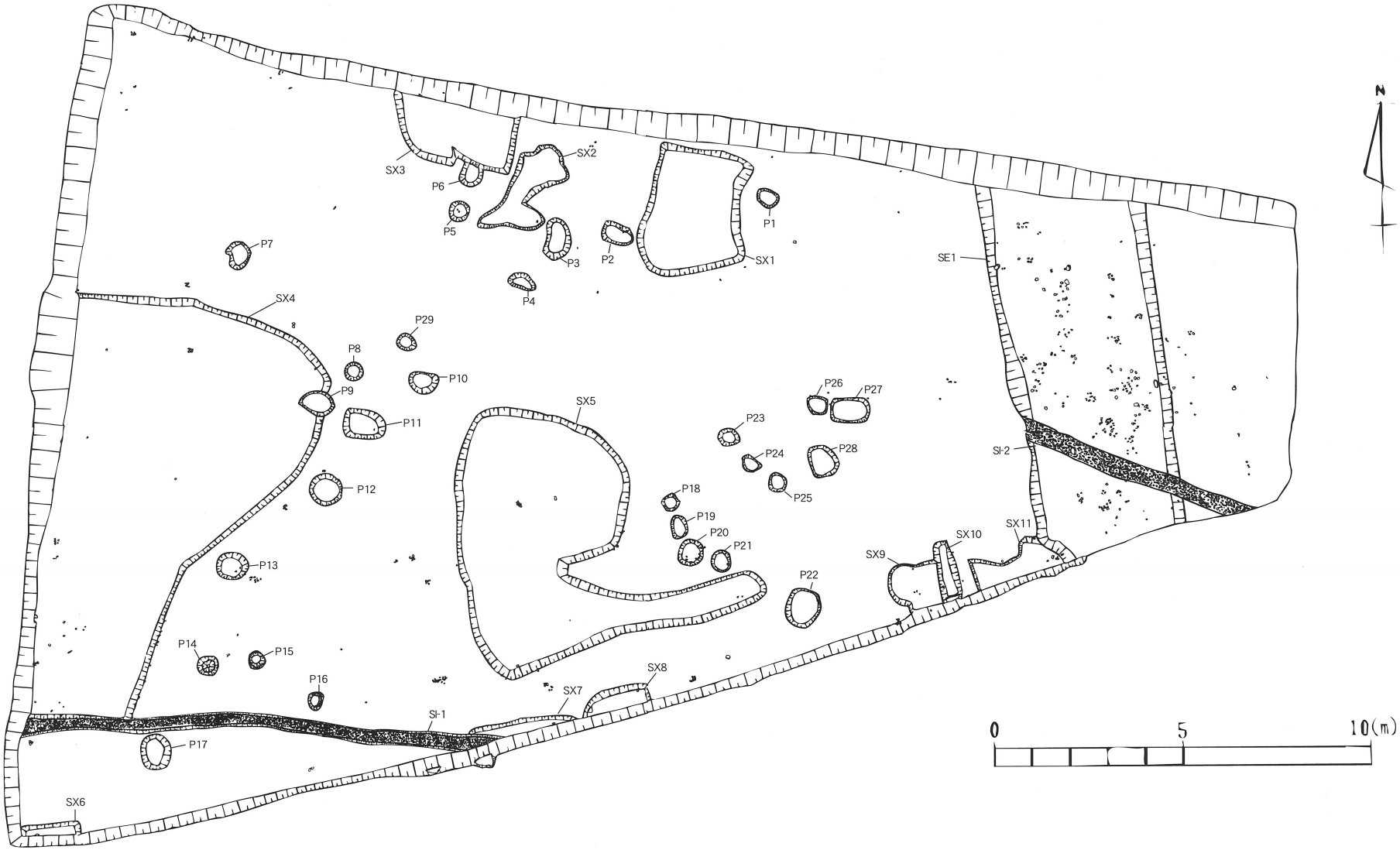
調査地区の東側隅を南北に溝状に縦断する。検出数は１で大きさは、幅約３ｍ８０ｃｍで深さは約８０ｃｍである。機能は、溝の幅・深さ・縄張り上北側に堀が設けられている点から曲輪内の施設の区分けに設けられていたのではないか。

4



第４図　内城縄張図　（吉本正典・福田泰典原図作成）
※『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』
1999.3　宮崎県教育委員会発行　一部加筆

第５図　内城第１遺跡等高線図



第６図　内城第１遺跡遺構分布図

第４節　遺物

縄文時代～中世期時代の土器・陶器（第８図）

１は縄文時代の壺である。胴部の一部で、器面調整は、外面は全体的に風化しているが横・斜目方向の工具痕があり、内面は指による横方向のナデ、工具による斜方向のナデが確認できる。

２は縄文時代の深鉢である。胴部の一部で、器面調整は、外面は斜方向のナデ ・貼付突帯があり、内面は横方向の貝殻条痕が施されている。

３は弥生時代の壺である。胴部の一部で、器面調整は、外面は横斜方向の刷毛目、やや斜め方向のヘラ磨き、内面は横斜方向のヘラ磨きが施されている。

４は弥生時代の鉢である。胴部の一部で、器面調整は、外面は横斜方向の工具痕があり、内面は横斜方向の工具痕が施されている。

５は弥生時代の壺である。胴部の一部で、器面調整は、外面は横方向の工具痕があり、内面は、斜方向のナデが施されている。

６は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。口縁部から底部の一部で、器面調整は、外面の胴部は、横斜方向のナデ、底部はヘラ切り、内面は横方向のナデが施される。

７は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。口縁部の一部で、器面調整は、内外面ともナデが施されている。

８は中世期の土師質土器の埦である。胴部の一部で、器面調整は、外面は工具による横方向のナデと指頭による横ナデ、内面は指頭による横ナデが施されている。

９は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。胴部の一部で、器面調整は、外面は工具による横方向のナデ、内面はナデが施されている。

１０は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。底部の一部で、器面調整は、外面はヘラ切り、内面はナデが施されている。

１１は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。底部の一部で、器面調整は、内外面とも摩滅している。

１２は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。底部の一部で、器面調整は、外面はナデ、内面は摩滅、底部は糸切り痕が残っている。

１３は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。底部の一部で、器面調整は、外面はヘラ削り・ヘラ切り、内面はヘラ削りが施されている。

１４は中世期の土師質土器の埦である。底部の一部で、器面調整は、外面はナデ・ヘラ切り、内面は風化している。

１５は中世期の土師質土器の甕である。頸部から胴部の一部で、器面調整は、外面は風化し内面はナデが施されている。

１６は中世期の土師質土器の埦である。口縁部から胴部の一部で、器面調整は、外面はナデ、内面は横方向のナデが施されている。

１７は中世期の土師質土器の皿である。底部の一部で、器面調整は、外面は斜方向の工具痕・ヘラ切り、内面は横方向のナデが施されている。

１８は中世期の須恵器の甕である。胴部の一部で、器面調整は、外面は格子状の工具痕と黒変あり、内面は粘土の繋ぎ目があり、ナデ?が施されている。

１９は中世期の陶器の甕である。胴部の一部で、器面調整は、内外面とも横方向のナデが施されている。

２０は中世期の陶器の甕である。胴部の一部で、器面調整は、内外面とも横・斜方向の刷毛目が施されている。

２１は中世期の陶器の埦である。口縁部の一部で、器面調整は、内外面とも釉薬が掛かっている。

２２は中世期の陶器の埦である。胴部から底部の一部で、器面調整は、内外面に釉薬が施され、底部にヘラ切り、釉薬が施されている。

縄文時代～弥生時代の石器（第９図）

１・２・４・６・８・１０・１１は縄文時代の剥片である。

１は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。表裏の両面とも一方向からの打点で剥離が行われる。縁部は二次的に極厚形細部調整により一縁が背部整形され、その他の縁部は刃部として使用されている。機能は掻器として用いられていたと推測される。

２は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。裏面は打面を設け剥離し、表面と打点は同一方向である。表面の一縁に二次的に細部調整が行われる。

４は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。表裏両面から一縁に二次的に細部調整が行われる。

６は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。裏面に石核から剥離した際の打点が観られる。

８は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。この剥片は、石核剥離の打面を形成する際に生じたと考えられる。

１０は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。表裏両面とも二次的な細部調整は行われていない。

１１は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。表裏両面とも二次的な細部調整は行われていない。

３・７は縄文時代の尖頭状石器である。

３は両縁が平行でなく、表面の稜が両縁が平行に走っていない石刃状剥片を素材にしている。裏面の一縁を細部調整している。機能は両縁が刃部で形状が尖頭状を成すことから刺突具として用いていたと思われる。

７は両縁が平行でなく、表面の稜が両縁に平行に走っていない石刃状剥片を素材にしている。基部は表裏両面から細部調整を行っている。

５は縄文時代の円形掻器である。

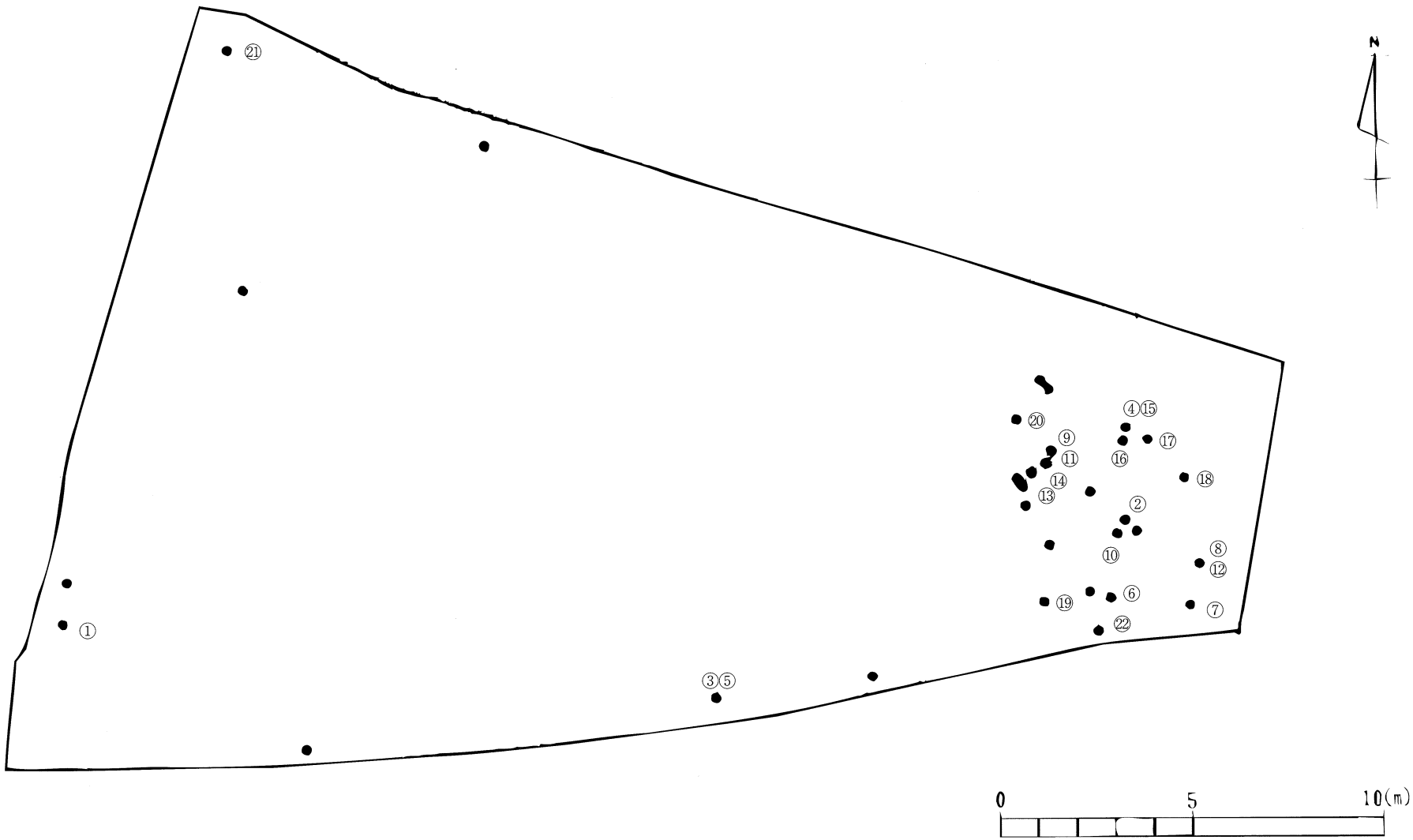
５は石核から作り出された剥片を素材にして全周縁に細部調整を行い刃部を形成している。機能は円形掻器として使われていたと思われる。

９は縄文時代の石鏃である。

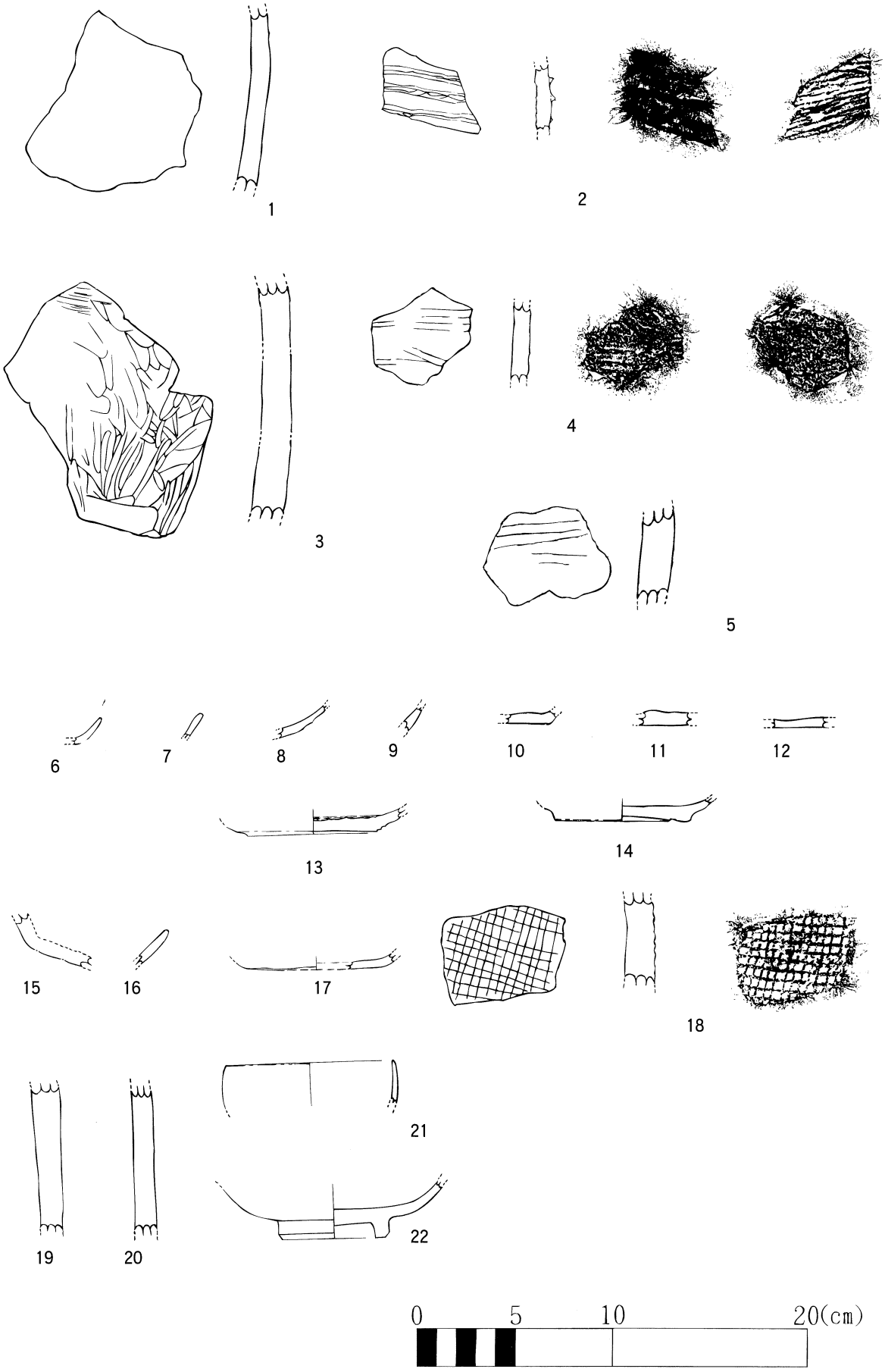
９は石核の上面打面を剥離した剥片を用いて石鏃の脚部を形成する。

１２は弥生時代の石斧である。

薄型の打製石斧で裏面に製作の剥離工程が行われている。基部は使用中に破損しており全表面は風化が進んでいる。



第７図　内城第１遺跡遺物分布図



第８図　内城第１遺跡出土遺物実測図（１）

第９図　内城第１遺跡出土遺物実測図（２）

内城第１遺跡

報告書番号	種別	器種・部位	出土地点	成形・調整・文様など				色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	口縁	底部	外面	内面		
1	縄文土器	壺胴部	1-15	風化・横斜め方向の工具痕あり	指による横方向ナデ、工具による斜め方向ナデ			にぶい黄橙(10YR 6/4)	にぶい黄橙(10YR 6/4)	微細～3mm大の雲母を含む。1mm～2mm大で半透明・黄橙の岩片を含む。	
2	縄文土器	深鉢胴部	1-30	斜め方向ナデ、貼付突帯紋あり	横方向の貝殻条痕			暗灰黄(2.5Y 5/2)	にぶい黄褐(10YR 5/3)	1mm大で無色透明で光沢のある鉱物粒を含む。微細～2mm大で灰白色・浅黄橙の岩片を含む。	
3	弥生土器	壺胴部	1-17	横・斜め方向の刷毛目やや斜め縦方向のヘラ磨き	横斜め方向ナデ、風化ぎみ			浅黄橙(10YR 8/4)	灰白(10YR 8/2)	1mm大で灰白色・橙色の岩片を含む。微細～2mm大で無色透明・黒色で光沢のある半透明の鉱物粒を含む。	
4	弥生土器	鉢胴部	1-10	横・斜め方向の工具痕あり	外面と同じ			浅黄橙(10YR 8/4)	にぶい黄橙(10YR 7/4)	1mm大で灰白色の岩片を含む。微細～2mm大で黒色・無色透明で光沢のある半透明の鉱物粒を含む。	
5	弥生土器	壺胴部	1-17	横方向の工具痕あり	斜め方向ナデ			浅黄橙(10YR 8/4)	灰白(10YR 8/2)	1mm～2.5mm大で灰白色・橙色の岩片を含む。1mm～1.5mm大で半透明の鉱物粒を含む。	
6	土師質土器	皿口縁～底部	1-4	横・斜め方向ナデ、横ナデ	横方向ナデ			橙(7.5YR 7/6)	橙(7.5YR 7/6)	1mm大の橙色の岩片を含む。	かわらけ
7	土師質土器	皿口縁部	1-6	ナデ	ナデ	ナデ		橙(5YR 7/6)	橙(5YR 7/6)	微細で黒色の砂粒を含む。	かわらけ
8	土師質土器	埦胴部(底部付近)	1-31	工具による横方向ナデ、横ナデ	横方向ナデ			橙(7.5YR 7/6)	にぶい黄橙(10YR 6/4) 灰黄褐(10YR 5/2)	微細～1mm大で橙色の岩片を含む。微細で無色透明で光沢のある鉱物粒を含む。	かわらけ
9	土師質土器	皿胴部	1-25	工具による横方向ナデ	ナデ			橙(7.5YR 7/6)	浅黄橙(7.5YR 8/6)	微細で灰白色の砂粒を含む。	かわらけ
10	土師質土器	皿底部	1-29	ヘラ切り	ナデ			にぶい橙(7.5YR 7/4)	にぶい橙(7.5YR 7/4)	1mm大で橙色の岩片を含む。微細で黒色の砂粒を含む。	かわらけ
11	土師質土器	皿底部	1-25	摩滅	摩滅			にぶい黄橙(10YR 7/3)	にぶい橙(10YR 7/4)	微細で灰白色の砂粒を含む。	かわらけ
12	土師質土器	皿底部	1-31	ナデ	摩滅			にぶい橙(7.5YR 7/4)	にぶい橙(7.5YR 7/4)	微細～1mm大で橙色の岩片を含む。	かわらけ
13	土師質土器	皿底部	1-23	ヘラ削り	ヘラ削り		ヘラ切り、ヘラ削り、風化、底径約6.65cm	にぶい橙(7.5YR 7/4)	にぶい橙(7.5YR 7/4)	微細で黒色の砂粒を含む。微細で無色透明で光沢のある鉱物粒を含む。	かわらけ
14	土師質土器	埦底部	1-24	ナデ、ヘラ切り	風化		ヘラ切り、底径約7.0cm	黄橙(7.5YR 7/8)	黄橙(7.5YR 7/8) 明褐灰(7.5YR 7/1)	1mm～1.5mm大で橙色・灰白色の岩片を含む。微細で黒色の砂粒を含む。	
15	土師質土器	甕頸部～胴部	1-10	風化	ナデ			橙(5YR 6/8)	橙(7.5YR 6/8)	1mm大の灰白色の岩片を含む。2mm大の灰色の岩片を含む。	
16	土師質土器	埦口縁部～胴部	1-9	ナデ	横方向ナデ	ナデ		にぶい橙(7.5YR 7/4)	にぶい橙(7.5YR 7/4)	1mm大で橙色の岩片を少量含む。	
17	土師質土器	皿底部	1-8	斜め方向の工具痕あり	横方向ナデ		ヘラ切り、粘土だまり、摩滅痕あり	にぶい黄褐(10YR 5/3)	橙(7.5YR 7/6)	1mm大で橙色の岩片を含む。	
18	須恵器	甕胴部	1-7	格子状の工具痕黒変あり	粘土のつなぎ目がある、ナデ?			橙(7.5YR 6/6)	橙(7.5YR 6/6)	微細で無色透明で光沢のある鉱物粒を含む。1.5mm大で黒岩で光沢のある鉱物粒を含む。2mm～3mm大で赤褐色の岩片を含む。5mm大で褐色、灰白色の岩片を含む。	
19	陶器	甕胴部	1-19	横方向ナデ	横方向ナデ			赤褐(10R 5/4)	赤褐(10R 5/3)	微細～9mm大で灰白色・浅黄橙・黒岩の岩片を含む。(橙・褐色の粘土が交互に重なっている。)	
20	陶器	甕胴部	1-1	横・やや斜め方向刷毛目、粘土だまり	横・やや斜め方向刷毛目			灰赤(2.5YR 5/2)	にぶい橙(5YR 6/3)	1mm～4mm大で黄色・白色・灰色・赤褐色の岩片を含む。1cm大で黒褐色の岩片を含む。	
21	陶器	埦口縁部	1-11	釉薬がかかっている	釉薬がかかっている			灰白(5Y 8/2)	灰白(5Y 8/2)	微細で黒色の砂粒を含む。	
22	陶器	埦胴部～底部	1-32	釉薬がかかっている	釉薬がかかっている		釉薬がかかっている、ヘラ切り	灰白(10Y 7/1)	灰白(10Y 7/1)	微細で灰白色の砂粒を含む。	

第１表　内城第１遺跡出土遺物観察表（１）

報告書番号	器　　種	出土地点	計　測　値			重量（g）	石　材	備　　考
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)			
1	石核剥片	1－3	7.25	6.65	1.75	111	流紋岩	二次加工剥片
2	石核剥片	1－21	5.75	5.25	0.9	35	流紋岩	
3	尖頭状石器	1－2	5.71	4.22	1.45	30	流紋岩	
4	石核剥片	1－14	5.32	6.6	1.4	40	流紋岩	二次加工剥片
5	円形掻器	1－16	5.30	5.65	2.35	77	砂岩	
6	剥片	1－22	2.12	3.06	0.68	5	流紋岩	
7	尖頭状石器	1－12	5.01	3.85	1.75	22	流紋岩	
8	石核剥片	1－5	4.18	3.05	0.98	14	砂岩	
9	石鏃	1－13	2.51	2.85	1.02	5	黒耀石	
10	剥片	28－55	3.38	1.95	0.86	5	流紋岩	
11	剥片	1－20	3.35	1.7	0.95	8	安山岩	二次加工剥片
12	石斧	1－13	7.2	5.2	1.2	65	砂岩	使用による破損

第２表　内城第１遺跡出土遺物観察表（２）

第３章　まとめ

今回の内城第１遺跡の調査では、遺構は主に５層の生活基盤層から柱穴２９・性格不明土坑１１・集石遺構２・溝状遺構１の計４３遺構が検出され、遺物は、縄文土器２・弥生土器３・土師質土器１２・須恵器１・陶器４・剥片７・尖頭状石器２・円形掻器１・石鏃１・石斧１の計３４点が出土した。

遺構・遺物が検出され出土した調査地は、内城の縄張りにおいて主郭曲輪Ｉの東側先端（調査面積：５７２．８４㎡）に位置する。主郭曲輪Ｉ（最大東西約２２０ｍ、南北１３０ｍ）は、南側尾根に沿って平坦地には曲輪を設け、必要に応じてルートを堀で断ち切っていく中で深く入り込んだ開析谷や裾部を流れる川を取り込んで北側の最終ラインに到達する箇所にある。主郭曲輪Ｉの両側には、曲輪のⅢ・Ⅳが構えておりその間に掘切が設けられ北側斜面は急崖と川による堅固な縄張りとなっている。

このように調査地は、内城の防禦上、最も重要な主郭曲輪Ｉの東側先端部に位置している。さらに調査地より東側へ行くと曲輪Ⅳとの間に掘切がある。

主郭曲輪Ｉの調査地の機能は、出土遺構の柱穴からは、掘立柱による簡易な建物が立ち並んでいたと想定できる。また溝状遺構や集石遺構は、建物間の区画として用いていたと考えられる。

調査地が使用された時期は、今回の発掘調査により出土した土師質土器・陶器・須恵器、及び宮崎県埋蔵文化財センターが同時期に平行して実施した内城全体の分布調査と一部の発掘調査で出土した銭貨（北宋期の１０世紀後半～１１世紀代の出土銭貨が半数以上）等を総合して１０世紀代から13世紀代に営まれた中世期の山城と推測できる。

調査地周辺で縄文時代から弥生時代にかけての遺物が確認されたが、これらは、アカホヤが２次堆積した中から検出されたもので城郭に直接かかわる資料ではない。

総じて、今回の発掘調査により佐土原町内の中世期の山城の一端を伺い知る貴重な資料を得ることができた。

報告書抄録

ふりがな	うちしろだい１いせき
書名	内城第１遺跡
シリーズ名	佐土原町文化財調査報告書
シリーズ番号	第１９集
編著者名	佐土原町教育委員会
所在地	〒880-0297　宮崎県宮崎郡佐土原町大字下田島20660番地
発行年月日	2001年（平成13年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	うちしろだい１いせき 内城第１遺跡
ふりがな 所在地	さどわらちょうおおあざひがしかみなかあざうちしろ 佐土原町大字東上那珂字内城
遺跡番号	５００４
調査期間	平成11年4月16日～5月31日
調査面積	５７２．８４㎡
調査原因	携帯電話無線基地局建設

佐土原町文化財調査報告書
第19集
内城第1遺跡
平成13年3月
発　　行　宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会
印　　刷　(有)宮崎新生社印刷